設楽発掘通信

No.77
令和５年
２月号

令和四年度成果報告会のご案内

今年を振り返りますと、まず大きな催し物として奥三河郷土館で秋の埋蔵文化財展「悠久の記憶」を開催しました。会期中に二四一八名の方に見学いただきました。今後も出土品の展示や遺跡の写真パネルを順次公開できるよう計画したいと思います。また、地元説明会を八月二〇日に大崎遺跡、一〇月二九日に下延坂遺跡で開催しました。今後も可能な限り説明会の開催を続けようと思います。

来年度も愛知県埋蔵文化財センターでは、設楽ダム関連の発掘調査を計画しています。新たな発見がありましたら『設楽発掘通信』などを通じてお伝えします。

（永井宏幸）

設楽ダム関連の発掘調査も、今年度は無事終了しました。町内にお住まいの方々や関係者の皆様のおかげをもちまして、今年度も注目すべき調査成果を得ることができました。まずはお礼申し上げます。

年度末三月に開催して参りました成果報告会『新設楽発見伝』は、今年度で九回目になります。コロナ禍により、昨年と一昨年の二回はオンラインの開催でした。今年は久しぶりに対面式の開催を予定しています。二月上旬に町内の皆さんにお配りしたチラシを下記の図に掲載しました。

日時は三月四日午後一時三〇分～四時四五分まで、会場は田口特産物振興センター（田口字向木屋三―一）、参加無料、申し込み不要です。

今回は、過去二年間の調査成果を含めた上ヲロウ・下ヲロウ遺跡、下延坂遺跡、滝瀬遺跡、大畑遺跡、マサノ沢遺跡、大崎遺跡、以上六つの遺跡について報告します。また、会場内には報告する各遺跡の写真パネルや出土品を展示します。

滝瀬遺跡の発掘調査が終了しました

二〇二二年十一月から発掘調査を行ってきた滝瀬遺跡（設楽町字八橋タキセ）の発掘調査が二〇二三年一月に無事終了しました。今回はその発掘調査の結果について紹介します。

今回の発掘調査では、滝瀬遺跡の中では、境川に近く、最も下流の部分で発掘調査を行いました（図1左側、図2中央左下）。出土遺物には、縄文時代草創期の尖頭器（せんとうき）の基部（尖頭器の付け根の部分、溶結凝灰岩製・図4・5）があり、遺構では、縄文時代後期の土坑（図3）が検出されました。特に尖頭器の基部は、石器を専門とする職員でさえ「おお、これはすごいですね」という感想がもれたほどの稀少さで、今回の滝瀬遺跡の発掘調査を代表する出土遺物となっています。

しかし、調査全体を振り返れば縄文時代の遺構は少なく、発掘調査中に掘削していた土の多くは江戸時代以降の新しい時代に堆積したものでした。この状況について、滝瀬遺跡の過去の調査を含めて見渡して見ると（図1左側）、２０２２年度調査のすぐ北側の２０１８Ａ区では谷状地形が検出されています。また、２０１６Ｂ区の南西隅にも同様の谷状地形がありますが、２０２２年度の調査区はこの谷状地形の中にあたるようです。

この谷状の地形がいつ頃にできたのか、詳しくはわかっていませんが、遺跡の中では比較的新しい中世や近世の時代に、地滑りのような原因で形成された可能性があるようです。谷の中には黒く柔らかい土が堆積しており、それを上手く活用して江戸時代以降には畑や水田として耕作が行われていました。そのような地形の中でも前述の尖頭器や土坑が残ったのは深い部分にあったことによるものと考えられます。「よくぞ残っていてくれた」というのが発掘調査に関わった人たちの一致した気持ちでもありました。

滝瀬遺跡のこれまでの遺構や遺物の分布状況（図1）からは、集中する部分（色つけした部分）と散在する部分（色の白い部分）があり、今回の調査では散在する部分に該当したようです。この分布状況には、元々の地形（がけや急斜面、平坦な場所など）の利用しやすさや、後の時代に畑や水田として利用する際の地形改変、今回の２０２２区のような自然による地形の変化（地滑りや土石流など）によって、大きく影響を受けていることがわかりました。

（鈴木恵介）

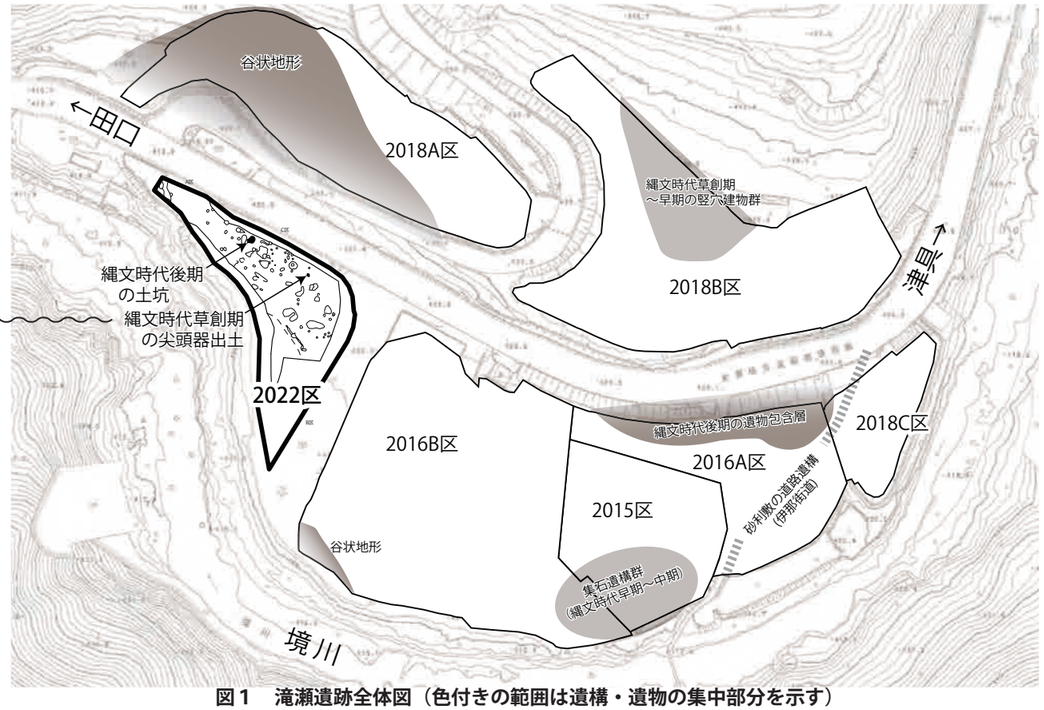


図１　滝瀬遺跡全体図（色付きの範囲は遺構・遺物の集中部分を示す）

図２　滝瀬遺跡全景写真（建設中の橋は設楽根羽線４号橋）

図３　縄文時代後期の土坑断面

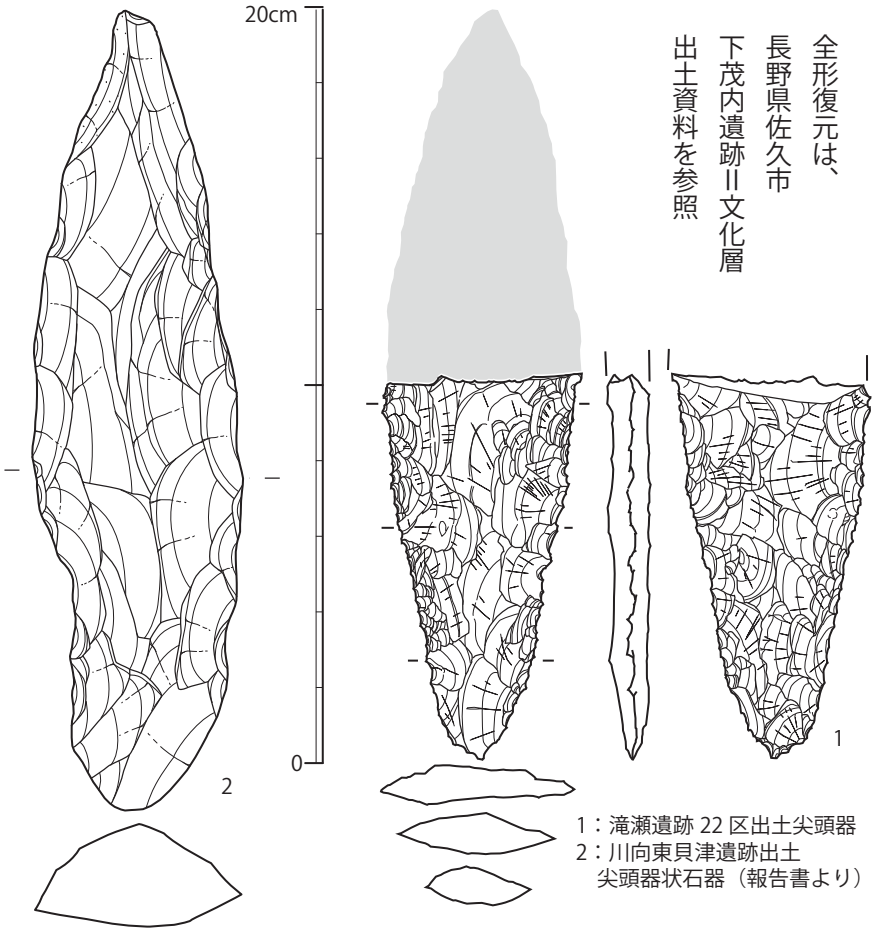
図４　右の「尖頭器 基部」出土状況

図５　2022年度滝瀬遺跡で出土した「尖頭器基部」(実物大)

滝瀬遺跡出土尖頭器について

本紙2・3頁のように、今年度の滝瀬遺跡では、尖頭器の一部と思われる石器が出土しました。ここでは資料自体についてもう少し詳しく紹介します。

左の図6の1が、滝瀬遺跡出土尖頭器です。現存している大きさで、長さ10・2㎝、幅5・3㎝、厚さ1・1㎝、重さ50・5gです。何かの事情で身部中央で中折れをしたものと考えられますが、残念ながら今回の調査ではその欠損部分を見つけることはできませんでした。加工の在り方（剥離）をみると均一ではないものの、両面とも同様な加工である上、両側辺側から身部中央に向かって剥離が入っており、断面の形がレンズ状を呈していることが分かります。



全形復元は、長野県佐久市下茂内遺跡Ⅱ文化層出土資料を参照

1：滝瀬遺跡 22 区出土尖頭器
2：川向東貝津遺跡出土尖頭器状石器（報告書より）

図6　滝瀬遺跡　尖頭器

この残っている部分を基部とみた場合、全体的に細身の尖頭器であると考えられ、推定全長20㎝弱に達する可能性が考えられます。反対に残存している部分を先端部とした場合、最大幅からすぼまる形状になるため、推定長が短くなるものの、それでも全長15㎝以上に達するものと推定され、いずれにしても大型の尖頭器であると言えます。時期は約一三〇〇〇年前の縄文時代草創期で、有舌尖頭器出現以前に位置づけられるものと考えられます。

石材は、北設楽で産出される安山岩です。この石材は後期旧石器時代から弥生時代に至るまで、当地では大型の打製石器によく使用された石材です。原石は境川の河原で採取できるもので、当地域の先史時代を象徴する石材資源であると言えます。

後期旧石器時代から縄文時代草創期の石器群がまとまって出土した川向東貝津遺跡では、長さ20㎝を越える尖頭器状石器が出土しています（図6の2）。大きな剥離による加工により製作されているもので、これも質はやや異なりますが、北設楽地域にみられる安山岩製です。この資料も縄文時代草創期に属する資料と考えられ、設楽地域の縄文時代草創期では、さまざまな尖頭器形状のものが製作されていた様子を垣間見ることができそうです。

（川添和暁）

設楽発掘通信 No.77
令和5年2月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話（0567）67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　株式会社アコード